

イエスがこれらのことを話しておられると、群衆の中から一人の女が声を張り上げて言った。「なんと幸いなことでしょう、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は。」しかし、イエスは言われた。「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である。」(ルカ11:27~28)

主イエスの言葉と行いは、民衆に深い感動を与えた。人々は、今まで聞いたことのない神の祝福の言葉を聞き、耐え難い苦しみから解放された。生きることに向かって勇気を与えられ、自分自身の存在を喜ぶ者とされた。

主イエスがいつものように話をしておられると、群衆の中から、一人の女性が声を張り上げ、「なんと幸いなことでしょう、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は」と言った。良い子を産み、育てた母親を見ると、人は羨ましく思うだろう。彼女は、主イエスを宿し、乳房を吸わせ、育てた母親は何と幸せな人かと、母親を羨んで、叫んだ。主イエスへの感謝が母親にまで及ぶ言葉になったのである。すると、主イエスは、「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である」と、真に幸いなのは、神の言葉を聞いて、それを守る人だと返された。主イエスは「神の言葉を聞いて、それを守る人」という言葉をしばしば語っておられる。

主イエスは民衆の支持と敬意を受け、休む暇がないほど、多忙を極めた。また、律法を守らない(守れない)人々を「罪人」と断定し、ユダヤの共同体から排除されていた人々を顧み、病を癒やし、共同体に連れ戻した。この行為は、律法に基く差別管理体制を壊す危険人物として、権力者たちから命が狙われるようになった。これらを伝え聞いた母マリアと兄弟たちは、故郷ナザレで平穏に暮らそうと主イエスを連れ戻しに来た。ところが、押し寄せた群衆に遮られ、近づくことができないので、家族の来訪を伝えてもらった。その時、主イエスは、「私の母、私のきょうだいとは、神の言葉を聞いて行う人たちのことである(ルカ8:21)」と言われた。肉親の関係を切って、神に聞き、それを行うことを第一義としている。しかし、この勧めの言葉に応えることは容易ではない。

パウロはガラテヤ書2章16節で、「しかし、人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、ただイエス・キリストの真実によるのだということを知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の行いによってではなく、キリストの真実によって義としていただくためです。なぜなら、律法の行いによっては、誰一人として義とされないからです」と書いている。律法・掟を行うことによって、誰一人義とされることはなく、ただ、イエス・キリストの真実によって義としていただく。イエス・キリストの真実とは、主イエスが貫いた神への信仰で、それは、十字架と復活の事実と受け止められる。人が神に義とされるのは、律法を守る行いによるのではなく、イエス・キリストの真実、即ち、十字架と復活によって、神からの義が与えられている。この恵みの事実「アーメン」と応えるのが「信仰による義」である。パウロは律法学者として律法に生きていたが、それに破れ、キリストの真実から来る光に「救い」を見出したのである。

主イエスの「神の言葉を聞いて、これを行え」という勧めは、パウロが言う「信仰による義」とは論点が異なる。主イエスは義を求めての行いではなく、神の命に生かされる真の幸いを説き、その幸いに到るために、聞き従う行いを勧める言葉を語ったのである。